



牧歌的な村の風景。村の生活はシンプルだ

■ フォトエッセイ ■

# もうひとつの「微笑みの国」 バングラデシュ

写真・文 安藤 裕二  
Yuji Ando

「微笑みの国」と言えばタイである。しかし、私はもう一つ知っている。それは、「バングラデシュ」という国だ。

実はバングラデシュと日本は縁の深い国だ。一九七一年にパキスタンから独立後、世界に先駆け日本はバングラデシュを国家承認し、一九七二年に国交樹立をしている。二〇一二年は国交樹立四〇周年という記念すべき年なのだ。しかし、日本においてバングラデシュへの馴染みはほとんどないと言っている。

「バングラデシュ」と聞けば、何をイメージするだろうか。大抵の人は「グラミン銀行」、「マイクロファイナンス」、「開発援助」、「ソーシャルビジネス」、「洪水」などの答えを思い浮かべるのではないか。それらの答えに共通しているのは、「貧困」のイメージが背景にあるということ。時にはその貧困のイメージが独り歩きし、「飢餓」や「危機」を連想されることさえもあるのではないか。的を射ている部分もあるだろう。しかしながら、実際にバングラデシュへ足を踏み入れてみると、そのイメージは一新される。そこにはたくさんの笑顔に溢れた「微笑みの国」があった。

## ● 高層ビルが林立する首都ダカ

日本からバングラデシュへ行く際に現在は直行便の就航はない。必ずどこかの国での経由が必要になるが、長いフライトの末に空港に降り立ち、ダカの街へ向かうと、多くの人のイメージにはない街が広がっている。四国と九州と北海道を足した一四万平方キロメートル程の面積に、人口約一億六〇〇〇万人が暮らしており、人口密度は世界一とも言われる。(写真1、2)

道路にはバスや自動車は勿論のこと、リキ





写真2：イスラム教徒が人口の90%を占める大人口国バングラデシュ。写真はムスリムの大イベント「ビショイセタ」の群衆。建物の上まで人で埋め尽くされる



写真1：5つ星ホテルや商業ビルも広がる商業地区では、常に渋滞が激しい

## ● 田園地帯が広がる地方と高い農業自給率

バングラデシュでは、親日感情が非常に強い。外国人が少ないこともあるが、人々はとてもフレンドリーで、あらゆる場面で外国から来た者のことをかまってくる。「どこから来たんだ?」、「どこへ行くんだ?」、「日本の給料はいくらだ?」など、何でもお構いなしに土足で踏み込んでくる。そんなバングラデシュの友人や同僚からはすぐに「俺の村へ遊びに来い」と「ダワット」（ベンガル語で「招待」の意）を受ける。ダッカの街にいと、静かな環境に浸りたくなる。

シャー・CNG（天然ガスで走る小型リキシャー）・バイクが我先にとベルやクラクションを鳴らしながら大渋滞の道を進んでいる。最近は電動リキシャーまで登場した。自動車は日本から輸入された中古車が約90%を占め、輸入時に三年以上という車齢制限があるため、意外にも目新しい乗用車が走っている。（写真3、4）

そして、多くの人々が向かう先には高層ビル群が広がっている。高層ビル街には五つ星ホテルや近代的ショッピングモール、商業ビルなどの多くが立ち並び、バングラデシュは年間約7%の経済成長を遂げている。ダカには全人口の約一〇%が住み、不動産価格は毎年約一五%で上昇していると言われる、留まることを知らない「沸騰都市」なのである。

写真3：市民の足であるリキシャーの列。道路ではクラクションが鳴り止まず、リキシャーが車と並走し、交通渋滞の原因にもなる。道端は工事中の道路、背景には増築中の建物が見える



写真5：サトウキビ畑が広がる村。村の産業の中心は農業だ



写真4：リキシャー（左）と最近登場した電動リキシャー（右）。電動リキシャーはハンドルをひねるとスクーターのように走り出す。両者の運賃は変わらない







写真7：村の風景。  
農作物の収穫へ向かう



写真8：村では動物達も一緒に暮らす。  
ヤギの顔もどこかしら凛々しい



写真6：日本でもおなじみの野菜が市場に並ぶ。  
計量はおもりを使った昔ながらの方法で行う

時には友人からのダワットに甘え、喧騒を離れ、村へ向かうのもいい。

村へ行くと一面に田園風景が広がる（写真5）。しかし、雨季になると多くの人が持つイメージに近く、多くの土地が水に沈む。ただこれが恵みの雨になって、栄養分が蓄積され、土地が肥沃になる。それが証拠に、米は三期作で栽培される地域もあり他にも豊富な農作物に恵まれる。市場に行くと日本でもおなじみの野菜も豊富に揃っている。（写真6）そう、何を隠そうバングラデシュは大農業国なのである。特に米が大好きで、「一日のうち二回は米を食べないと落ち着かない」と言う程である。国連食糧農業機関（FAO）によると、直近の国民一人当たりの年間コメ消費量は一六〇キログラムで世界第四位というデータもあるほどだ。バングラデシュの穀物自給率は九〇%を超え、特に米に関してはほぼ全てを自国で賄っている。「貧困」のイメージとは程遠い、自分たちで食べていける「強さ」がバングラデシュにはある。

そんなバングラデシュを支える村の生活は実にシンプルだ。都会のように物に囲まれておらず、農漁業と牧畜が中心の生活である。電気が通っていない家も多い。畑を耕し、家畜を育て、家族とともに過ごす。毎日の生活に大きな変化はないが、それでも笑顔に溢れた風景があった。（写真7、8、9、10）

勿論、村には絶対的貧困がある。数字だけで見ると一人当たりGDPは六八四USD（二〇二〇年度）と未だ低い。五〇%程度という識字率や経済格差の問題もある。しかし、多くの課題を抱えながらも、人々は逞し



写真10：無邪気な笑顔でどこまでも駆け寄ってくる村の子どもたち



写真9：村での主要産業の一つである牧畜。イスラム教の「イード祭」前に、市場で牛を売る人達



写真14：鼻水を垂らしながらも、笑顔で答えてくれる  
スラム街の少女



写真11：線路沿いのスラム街。危険な環境でも生活が営まれる。  
ダカの経済格差は著しい



あんどう ゆうじ／アジア経済研究所 在バングラデシュ・ダカ海外研修生

2008年4月～2011年8月の期間、研究企画部研究人材課勤務。  
2011年8月より一年間の海外研修生として、バングラデシュ・ダカへ派遣。

く生きている。

日本出身の都会暮らしの筆者による一方的な意見であるが、本当のバングラデシュとは村の姿なのではないか。ダカの街だけを見て、バングラデシュを語ってほしくない。最近はその強く思っている。

### ●そしてまたダカの街へ

またダカの街へ戻ってくる。村では目にしなかった物乞いの姿が目に入る。都市に暮らす人々は物価の高騰に苦しんでいる。交通渋滞は解消されない。停電も頻発する。問題は山積だ。しかし、この街は動き続ける。

線路沿いのスラム街に足を運ぶ。(写真11、12) 見慣れない外国人が来たということ、子どもたちが「私を撮って！ 僕も撮って！」と駆け寄ってくる。村でも共通していることは、みんな偽りのない笑顔で迎えてくれることだ。貧しい中にも笑顔がある。(写真13、14) 家族や友人と暮らせ、米が食べられ、自分たちが話すベンガル語という言葉に誇りを持つ。今の日本が失ったものを思い出させてくれる何かがバングラデシュにはあるように感じる。幸せとは何なのか。バングラデシュの人々を見ると、深く考えさせられるのである。「経済発展をしても、どうか人々はこのままの笑顔でいて欲しい」。筆者がそんな自己中心的な考えを持つ一方で、バングラデシュという国は前へと進み続ける。もうひとつの「微笑みの国」バングラデシュは、誰をも笑顔で迎え入れてくれるだろう。



写真13：ダカの線路沿いのスラム街の子どもたち。スラム街の横は商業地区が広がる



写真12：湖沿いのスラム街。背景には高層ビルエリアが広がる